

の病気が「寒さ」や「熱さ」のために起こっていると考え、その原因を取り去る手段を治療法としている。

施灸や灸頭針には、気血を温めることによって気血を通じさせて病気を治す働きがある。病気は、身体の冷えのために気血の流れが障害されて起こっていることも多い。自覚的に冷えている場合もあるが、自覚症状に乏しい例では、他覚的に冷えを察知する。その診断手段としては、脈診では沈遅、舌診では白く赤みがない、腹診では手で触れたときの冷感や腹筋の無力感、下腹部の臍下不仁などを参考にする。

3 刺絡

刺絡とは、穴位または病んでいる局所から直接瘀血を排除し、気血を強く通じさせる手段である。

(1) 刺絡の目的

刺絡とは、澱んで循環しない瘀血を除去し、全身の気血のめぐりをよくする治療法である。瘀滞していた末梢性静脈の流れが改善されるため、障害されていた部位の痛みや機能不全が急速に改善される。

ほかの刺針療法でも効果ははっきりしないときや、瘀斑や細絡がある場合は刺絡することによって劇的な効果が得られる。

刺絡は、末梢性静脈系うっ血を取り去る手段である。現代医学では動脈系の循環不全を改善しようとするが、東洋医学では末梢の静脈のうっ血を改善することによって血流をよくしようとしている。

この違いを「交通渋滞」にたとえてみよう。たとえば、東京都内で交通が渋滞しているとしよう。現代医学では、都内に入る道路に相当する動脈に注目し、その流れを改善しようとする。一方、東洋医学では、都内で停滞している車を早く都外に流れるように配慮しようとする。

それぞれの時代の技術力に応じて、なんとか病気を治そうと努力している。両方の手段を用いれば、より血流はよくなるが、考え方の違いがおもしろい。

(2) 刺絡の臨床効果

運動器疾患の最大の苦痛は痛みと機能不全である。刺絡することによって現れる最も著しい効果は止痛効果が得られることである。鎮痛作用のほか、さらに以下のような効果が得られる。

- ①止痛作用（痛みを取る）
- ②消腫作用（浮腫を治す）
- ③治麻作用（麻痺を治す）
- ④止痒作用（痒みを取る）
- ⑤血管を拡張させ、微小循環を改善させる。
- ⑥井穴刺絡は全身病を治す働きがある。

(3) 刺絡に用いる道具と使い方

刺絡の手技を具体的に説明する。以下の方法は、筆者が毎日の診療のなかで考え出した方法である。

三稜針は一般的に使用されている刺絡のための道具であるが、筆者は三稜針以外に、これまでの臨床経験から工夫して採血用穿刺器と注射針を使用している（図 1-16）。

採血用穿刺器は、糖尿病患者が血糖を測定するために使用するものであり、一般の人々が毎日の血糖測定のために使用するよう薬局で販売されており、鍼灸師の方々が使用してもいっこうに差し支えない。

筆者がある講演で採血用穿刺器を使用して刺絡する方法を説明すると、後日その便利さに感謝されたことがある。痛みがほとんどないため、井穴刺絡や手足の末梢の痛みにも敏感な部位への刺絡に適していると思われる。最近では、1人に1回だけしか使用できないディスプレイタイプの採血用穿刺器の針が発売されている。

また注射針は、細絡や限局した血絡を狙い撃ちするのに適している。注射針の使用に関しては、出血させることに変わりはないが、鍼灸師の方が抵抗を感じるなら、太めの毫針、または針先の小さな刺絡針を使用するとよい。

①刺絡のための道具

筆者が刺絡する道具としては、バネ式三稜針・毫針・注射針・血糖測定のために用いる採血用穿刺器（図 1-16）・抜缶用の吸引器（図 1-17）・梅花針（セイリン（株）製小児針）（図 1-18・19）を用いている。そのうえ、陰圧で血液を吸引（抜缶）するために吸角がときに必要である。また感染予防のためにゴム手袋が必要である。

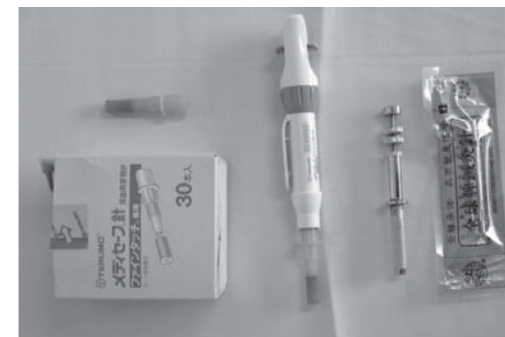


図 1-16 刺絡に用いる道具
（左から）穿刺針と血糖測定用の採血用穿刺器（テルモ（株）製）、バネ式三稜針、毫針



図 1-17 抜缶用手動吸引器と吸角